文京区立森鷗外記念館　特別展

写真の中の鷗外 人生を刻む顔

2022年
1月9日(日)〜4月17日(日)

森鷗外（1862－1922）は、現在の島根県津和野町に生まれ、東京大学医学部を卒業後、陸軍軍医の職につきました。軍医としてドイツへ留学し、二度戦地に赴き、福岡県の小倉への赴任等を経て、のちに陸軍省医務局長となります。その傍ら西欧文学の翻訳や創作小説、評論を発表し、明治・大正の知識人でもありました。

鷗外の姿は、1872（明治5）年に上京した頃から晩年まで沢山の写真の中に残っています。本展では、鷗外の生涯や職務、文学や美術など他の分野に渡る業績を、写真をとおして紹介します。また、居宅・観潮楼（現・当館）で撮影された写真から、文京区の団子坂上で30年間を過ごした鷗外や家族の暮らしに思いをはせます。

鷗外は自らの顔について、生まれたままの顔ではなく経験が作り上げた顔であると語っていました。一見、順風満帆に見える鷗外の人生ですが、家庭と職場で努力を重ね、自身を鍛え乗り越えてきたという自負から生まれた言葉なのかもしれません。若き日から勤め続け歳を重ねた晩年まで、その顔かたちやまなざしに注目します。

2022年、鷗外は没後100年・生誕160年を迎えます。現在は文豪と言われる鷗外ですが、私たちと同じように仕事に励み、執筆にも情熱を注いだ60年を生きました。写真の中の等身大の鷗外をご覧ください。

「おれなんぞの顔は閲歴が段々に痕を刻み附けた顔で、親に生み附けて貰つた顔とは違ふ」
鷗外『半日』より

雑誌社が撮影した出動前の鷗外（右）の姿　明治45年撮影
※左は人工知能を使用し、手作業で着色したイメージ写真です。必ずしも当時の色を再現していない場合があります。

東京大学医学部の同窓生24名の肖像写真を収録した『卒業二十五年紀念写真帖』 左・鷗外　明治39年

慶應義塾大学部で美学講師をつとめる　前列中央・福澤諭吉、右端・鷗外　明治30年撮影

陸軍軍医学校長を務めた　前列中央・鷗外　明治30年頃撮影

津和野から上京した頃の父・静男と鷗外（左から3、4人目）明治5年、江崎礼二写真館撮影

明治40年から陸軍省医務局長を務めた　前列中央・鷗外　大正3年撮影

文芸誌「めさまし草」を主宰した幸田露伴（中央）、斎藤緑雨（右）と共に　明治30年撮影

居宅・観潮楼の庭で家族と共に　右端・鷗外　明治30年撮影

森家の主家・亀井家の縁戚、有馬家の若者と共に　明治26、27年頃、江崎礼二撮影

ドイツ留学中、ドレスデンにて軍医仲間と共に　左・鷗外　明治19年撮影